

中山照重歌碑

(なかやまてるしげかひ)



【所在】

鷹栖町南1条3丁目
(緑地公園内)

【指定年度】

昭和63年

【歌碑建立】

昭和55年

町開拓の先駆者 中山照重

中山照重は町開拓の先達で、弘化4年、山梨県北巨摩郡篠尾村下笹尾に田中伝五衛門の長男として生れ、四歳のとき同村中山定吉の養子となった。明治27年に平田寛康らと共に北海道移住を志し、甲州団体として近文原野に入地した。3年間の苦闘の末、44戸の移住を完了し、成功検査を受けて一部落を形成した。

オサラッペ川上流の開拓が急速に進むにつれて、水源涵養地の保水力が減少し、畑作は湿潤の地に向かず、稲作に転向を決意し、石狩川からの水を盆地に引き込む一大灌漑溝の事業を計画し、同志を募り、水利調査会を設立。明治38年9月、近文土功組合を設立、ただちに道内屈指の大灌漑溝を掘削し完成したが、そのため洪水は更に頻発した。大正6年に村長になるや、オサラッペ川治水は緊急を要するとして、鷹栖土功組合を設立し、オサラッペ川治水を一任することにした。住民の力で成し遂げなければならなかったほどに、急を要していたのである。

その後、照重は公職を退き、77歳の折、移住民の中に庭師の心得のある安田某が句歌碑刻字を請け合い、中山庭園を設けた。大正14年9月26日没した。

昭和55年、町郷土史研究会の発議で、歌碑を自宅の庭園から役場庁舎裏の緑地公園内に移転し、今日に至っている。